

# 今、私たちが見つめるべきもの

## ——被災地石巻から——

関 川 祐一郎\*

### はじめに

今回このような機会を頂き真に感謝しています。私がおか偉そうなことを語れる立場ではないのですが、この4月から被災地で暮らしている者として私の小さな経験から少しお話できればと思います。

私はこの4月より日本基督教団石巻山城町教会の伝道師として働いている者です。私は両親が牧師の家庭に生まれました。ですから生まれる前から教会に通っていたことになります。

私はこの3月に東京神学大学大学院を卒業しました。東京神学大学というのは牧師を養成するための大学です。神学部しかない単科大学でおそらく日本で一番小さい大学と言えるかもしれません。学部1年生から大学院まで合わせても学生数は110名程度です。小さな大学ですが、そこで学ぶ学生は実に多様です。高校を卒業してすぐ入ってくる人は少なく、皆さん一般の4年生大学を出た後に編入してくるか、社会人として仕事を何年かした後に入ってくる人もいます。中には仕事を定年したあとに来る方もいます。私の在学中の最高齢は77歳の女性でした。最年少が高卒の18歳で

---

\* 日本基督教団石巻山城町教会伝道師

すから実に10代から70代までの人々が机を並べているのです。このような大学は他に無いのではないのでしょうか。また経歴も実に多彩です。銀行マン、商社マンだった方もいれば、大学教授だった方もいます。それぞれが神さまからの召命を受けて牧師なろうと決意して大学に入ってくるのです。

そのような中でなぜ牧師になろうと思ったのかを少し話させてください。私も大学3年ぐらいまでは普通に就職を考えていました。就活も少ししました。しかしその中で、自分は今まで何によって生きてきたのか、私を形作ってきたものは何なのかということを真剣に考えるようになりました。正直それまではそこまで将来について真剣に考えたことがなかったのです。

そのときにやはり自分のこれまでの歩みの中でキリスト教というものは欠かせないものであったことに気がつきました。神さまによって生かされ、ここまで導かれてきたということを確認できたのです。日本のクリスチャン人口は1%と言われています。その中で生まれる前からキリスト教というものにどっぷりとつかることができたのは逆に大きな恵みであると思いました。だからこそキリスト教というものを一人でも多くの人に伝えていきたいと思い、牧師なろうと思いました。

東京神学大学に入ってから、生活が一変しました。皆さんやはり牧師になるという目的を持って入ってくるのでまず勉強が大事です。ギリシャ語やヘブライ語など語学も大変なのです。ここにいらっしゃる小室先生にも宗教史という授業や、教会でお世話になりました。

神学校で学部、大学院で4年間学び、修士論文も無事提出すると任地が決まります。私の場合は昨年の10月ごろに話がありました。そのときに言われた場所が石巻山城町教会でした。任地が決まってからは、色々と石巻のことを調べたりしながら、あとはもう自分が行くだけだと思っていました。しかしまさかの事が起こりました。

東日本大震災です。牧師としてのスタートを切ろうとしていたまさにそのときでした。3月11日の大震災の日はちょうど大学院の卒業式でした。卒業式の真最中に地震が起きました。いつもの地震とは違い横に大きく揺れて、かなり長い時間揺れていました。チャペルの天井のライトが落ちてくるのではと思ったほどです。チャペルは築40年近く経っているので、崩れるのではないかと恐怖を覚えました。東京は震度5の地震だったのですが、直後に交通機関がすべてストップし大変な状況でした。私は車で大学に通っていたのですが、いつもは50分ほどで帰れる道が大渋滞で3時間ぐらいかかりました。

そのときはまさか自分が遭わされる場所が甚大な被害が出ているとは思いませんでした。初めのうちは報道でもなかなか石巻の情報が伝わってきませんでした。おそらく報道機関も石巻に入る事が困難な状況だったのだと思います。

石巻の教会とも10日間ほど連絡がとれませんでした。前任の牧師先生の安否も、教会員の安否も分からない状況が続き、落ち着かない日々が続きました。

10日ほど経ってようやく連絡がつくようになり、教会員の方々が無事であるとの知らせを受けました。

もともと私は3月30日に石巻に入る予定でいました。そうした中で真っ先に石巻に入るべきなのか、それとも状況をもう少し見るべきか悩みました。無鉄砲に被災地に入る事がよいのかどうかも考えました。一方で状況が把握できない石巻に入ることへの恐怖もありました。当時は高速道路も使えず、ガソリンも入手困難な状況でしたので、とにかく30日まで様子を見ることにしました。

幸い30日あたりから徐々にガソリンが流通しだし、高速道路も開通し出したので、身の回りの物を車に積み込み、石巻へと向かいました。引越し業者はこのような状況では行けないということだったので、とにかく

車に積めるものだけを積んで向かいました。

初めてのころはとにかく生活に慣れるのが大変でした。東京での不自由のない生活からいきなり被災地での生活になったからです。近所のお店はすべて津波に流された状態ですので、食べるものは物資で運ばれるパンやおにぎりです。それらもだんだん賞味期限が切れてくるので、朝昼晩ひたすらそれを食べていました。

その後は前任の牧師先生夫妻と共に教会員のいる避難所を回ったり、泥かきの手伝いなどをしました。前任の先生たちは4月から大阪の教会に転任予定でしたが、震災が起こり、4月19日まで石巻に留まり必死に働いてくださいました。その間先生たちと私の3人で牧師館で共同生活を送りました。私にとっては共同生活の期間がとても助けになりました。良い引き継ぎのときともなり、何よりも先生たちがいてくださったことが心強かったのです。

石巻に赴任してからは、ひっきりなしに人が訪ねてくるのがなかなか大変でした。電話も一日に何度もかかってきます。一日に何度も被災地が一望できる日和山という山まで案内しました。

しかしこれも被災地の教会の務めだと思っています。石巻まで来て下さった方に現状を見てもらうことはとても大事なことです。しかし中には何しに来たのかなと首を傾げたくなる人もいたことは事実です。珍しいもの見たさで来ているのではないかと思える人もいたからです。



石巻山城町教会

## 1. 教会がしてきたこと、震災当時の教会の状況

3月11日の震災の日前任の先生ご夫妻は山形への出張の帰りで仙台にいました。仙台で遅めの昼食を取っているときに地震が起きたそうです。そこで慌てて車で石巻まで帰ろうとしました。仙台と石巻は距離にして約50キロ離れています。車で大体スムーズに行って1時間10分ほどの距離です。前任の鈴木先生ご夫妻が石巻の手前の町の矢本という所に着いた時、津波の波が車のタイヤの上あたりまで迫ってきたそうです。そこで慌てて車をUターンさせたと言います。結局その日は石巻に入ることができず、三日間矢本の避難所で過ごしたそうです。

今回の震災では多くの方が避難所で暮らしました。避難所と言っても場所によって大きな格差があったそうです。特に最初のころは食料に本当に困窮したと言います。二日で魚肉ソーセージ一本だとか、日に日に配られるおにぎりが小さくなっていったと言います。牧師先生たちも日々の糧を得ることの大変さを身を持って感じたと言います。

その間教会はどうなっていたか。教会は日和山という小高い山のふもと  
の少し高台にあり、津波の被害は免れました。しかし、教会の坂を5、60  
メートル下って行くと津波に破壊された町が広がっています。3月11日  
は金曜日でしたから、14日の日曜日は山に住む三人の教会員たちが教会  
に集まり、祈ったと言います。そのとき牧師先生は未だ石巻に入る事がで  
きず、避難所にいました。

教会の前の坂を下ると商店街があるのですが、そこはもう壊滅的です。  
ほとんどの家が一階の天井もしくは二階近くまで波が押し寄せました。信  
号もなぎ倒されているという状態です。つい3週間ほど前によく信号  
が復活しました。信号がついてないというのは何とも不気味な感じがしま  
す。

津波の場合徐々に水が上がって来るのではなく一階の天井あたりまでの  
波が一気に押し寄せます。そして一瞬にして町を飲み込むのです。石巻山  
城町教会には36名の教会員います。平均年齢は70歳近くで高齢の方が多



教会そばの交差点（4月1日）

今、私たちが見つめるべきもの

い教会です。その中で14名近くの方々が家を失ったり大きな被害を受けました。幸い津波で直接的に亡くなった方はいませんでしたが、もともと入院されていた方が震災後に急激に体力が低下し、4月23日に天に召されました。その方とは生前は一度もお会いすることができず、納棺式のときに初めて対面しました。

また家ごと何もかも流されてしまったり、家がほぼ全壊の方が何人かおられます。あとは高齢の一人暮らしの方は、石巻を完全に離れて息子さんが住む関東に移住された方もおられます。津波から命からがら逃げた方の話を聞くと、皆さん本当に九死に一生を得たという感じです。ほんの一瞬の差で助かったという方が多いです。津波が迫って来る時はゴォーっという今まで聞いたとの無い音がしたと言います。

ある方は家の一階部分が完全に浸水し、何日間か二階で過ごしていたそうです。隣の畑には津波で亡くなった方の遺体があったと言います。なかなか遺体の収容に来られず、二階の窓から何日間かずっとその遺体が見え



東京 YMCA のボランティアと共に

ていたと言います。

教会には震災後たくさんのボランティアの方々が来て下さり、大量の物資を届けてくださいました。クラッシュジャパンというアメリカのキリスト教系ボランティア団体やサマリタンズパースという団体が物資を送ってくださいました。アメリカの団体はこのような災害が起こったときのために物資を常に備蓄しているようです。段ボール何十箱もトラックで来て置いていってくれます。

教会が段ボールで一杯になるほど物資が集まりました。そこで当初は教会を近隣の方々に開放し物資の配給場所としての機能を果たしていました。またボランティアの方々の宿泊の拠点としての機能も果たしていました。

物資を配るのも結構大変なのです。送られた物資をしっかりと仕分けしなければならないからです。物資の配給を受けに来る方の中には、段ボールまるまる持っていってしまう方もいます。なるべく多くの方に行きわたるように物資の段ボール中のものを出し、それを仕分けする作業が行われ



教会に集められた物資



ました。お米なら袋に小分けして一人何個までと決めていたそうです。震災直後は教会員のほとんどの方が被災していましたから、働ける教会員は3人ほどでした。しかもみなさんかなり高齢の方です。

そのため体力的にもしんどい中で教会を開放していました。体力も限界に達してきたので3月の終わりで一旦物資を受け入れるのをやめました。そこから残った物資をとにかく捌いていくという形をとりました。

その後もYMCAなどのボランティアの方が来て下さり、教会員や近所の方の家の泥かきの手伝いをしました。私も手伝ったのですがヘドロかきというのはかなり体力がいります。重油などが混ざって粘土質でかなり重いのです。そして匂いもすごいです。そのヘドロが家の中に20センチほど堆積しています。その上家の中に外から入ってきたがれきが散乱しています。中の物を出し、そしてヘドロをとにかく掻きだす作業をしなくてはなりません。とにかく一日中その作業をしていました。畳をあげるのも大変でした。水を吸ってしまっているのかかなり重いのです。男性4人でやっと持ちあがるというぐらいです。

しかし教会を通して近隣の方々に物資を配給したり、ボランティアを紹介することができたことは非常に良いことでした。地域において存在感を示せたのではと思います。

## 2. 今石巻で必要なこと

・震災から半年経ち、私はようやくここからスタートという感じがしています。半年間はそれぞれがとにかく自分の生活を整えるのに必死だったと思います。必死で走ってきたのではないのでしょうか。

半年経って精神的なよりどころというものがますます必要になってきていると思います。例えば音楽などです。

・精神的なよりどころ

石巻は合唱が盛んな地域です。多くの合唱団があります。しかしそれらの合唱団は震災後練習場所を失い、活動ができていませんでした。そのような中で震災後教会が練習場所を提供しています。現在二つの団体に提供しています。週一回でもそのような場所があるということは生活にもメリハリができてよいようです。

また、10月8日には「チェロとピアノによる教会コンサート」を行いました。これは東京の中渋谷教会が資金面、演奏者の紹介など全面的にバックアップしてくださったことによって実現しました。チラシや新聞、口コミなどで100名近くの方がいらしてくださいました。来てくださった方々の中には仮設住宅に住んでいる方々や、津波で娘さんを亡くされた方などもいらっしゃいました。皆さん感激し、涙を流して聴いておられる方もいました。翌日の礼拝にはコンサートに来て下さった方が6名ほど礼拝に来て下さいました。

このコンサートを通して石巻の人々が、精神的なよりどころを求めているのだということがはっきりと分かりました。

### 3. 被災地で牧師として語ったこと

#### コリントの信徒への手紙 二 4章16～18節から

このような未曾有の状況の中で牧師として遣わされた自分は何が語れるのかと非常に悩みました。3月30日に石巻に着いた時、教会員の方が海沿いの街並みが見える場所に案内してくださったのですが、そのとき目の前に飛び込んできた風景は生命力の全く感じられない破壊し尽くされた光景でした。正直言葉がでませんでした。それと同時に恐怖と不安が一気に襲いかかってきました。この破壊された町で生活していかなくてはならないという恐怖感です。また震災の恐怖と苦しみを味わっていない自分を被

災した人々が果たして受け入れてくれるのかという不安もありました。こんな自分が語る言葉に果たしてどれほどの説得力があるのかと思われました。

そしてこのとき初めて自分が牧師としてこの地に遣わされたという実感がわきました。それまではいくらニュースで流れる映像を見ても、リアリティを感じていませんでした。石巻に到着したあの日の映像は一生忘れないと思います。

私自身震災を石巻で直接経験したわけではありません。こうした中で牧師として何ができるのだろうか。牧師の第一の務めと言うのは何よりも毎週の礼拝の説教を語る事です。次の日曜日からは説教をする務めが与えられています。そのときに与えられた聖書の箇所がコリントの信徒への手紙二 4章16～18節の御言葉です。私自身がとにかくこの聖書箇所に慰められたいとの思いで、地鳴りの伴う余震に不安を覚えつつ御言葉に取り組みました。そのときには自分自身が御言葉聴かなければ立てないと思いました。

パウロは18節で「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」と語ります。そしてその答えとして「見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです」と語っています。今回の震災は津波によって「目に見えるもの」が一瞬にして取り去られる経験でありました。数分前、数秒前まで目の前に存在していたものが一瞬にして波に飲まれて消えてしまったのです。

こうした中で私たちは何によって生きるべきなのかということが問われていると思います。それが「神を求める」ということだと思います。私たちは今一度、目に見えない神の御言葉によって生きる信仰を求めたい。もちろん「目に見えるもの」は大切です。私たちは「目に見えるもの」の中で生きています。目に見える物質的なものがなければ生きていけません。その意味でお金や物はとても大事なものだと思います。

しかし今回の震災ではそれらが一瞬で波に飲まれてしまいました。このような中で人々は何を求めるべきなのか。その答えを聖書ははっきりと私たちに教えてくれています。

2000年以上にわたって読み継がれてきた聖書は、私たちが真の意味で安んじられるのは、神の御言葉によって知らされる主イエス・キリストの救いと、永遠の命への希望であるとはっきりと語ります。この世界は神様によって造られました。そして私たちの命もまた神さまによって与えられています。私たちにはどのようなときもこのお方が共にいてくださるのです。困難に直面したとき、悲しみの中にあるとき共にいてくださるのです。

私たちは困難に直面したときどうしても自分の力で解決しようとしません。もちろんその努力は大切なことです。しかし時に自分の力ではどうにもならない場合があります。そのようなときに自分自身の内に解決の糸口を見出だすのではなく、私たちの外なるお方にこそ希望はあるということを感じたいと思います。この希望は目には見えません。しかしだからこそ決して取り去られることなく、確かなものとして永遠に生き続けるのです。

神を求めるということは決して合理的なことではありません。しかし人間の心というのは物質的に満たされたからと言って幸福にはならないのです。合理的でないもの、精神的なものを求めるのです。旧約聖書の申命記8章3節には「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」という言葉があります。

私たちは日々の糧と、聖書が語る神の言葉によって満たされるのです。求めるべきものが何であるのか、それを指し示し続けることが教会やキリスト教学校の使命だと思っています。

石巻山城町教会は今年で創立126周年を迎えます。126年間石巻の地に建ち続け、言ってみれば石巻の良い時代も悪い時代も見続けてきました。

今、私たちが見つめるべきもの

かつて石巻は港町で非常に栄えた町でした。今は商店街もシャッターが閉まっている店が多いです。そのような中で教会がなすべきことは、やはり石巻という場所で希望の光を灯し続けることだと思います。このような状況であるからこそ、その光を決して絶やすことなく、人々に示し続けて行かなくてはならないのです。教会がまず第一になすべきこと、それは何よりも御言葉による復興である。私たちが本当に見つめるべきものを石巻の地で力強く証ししていきたいと思っています。

注記 本稿は、2011年11月2日に、金城学院大学の「キリスト教の時間」のために、エラ・ヒューストンホール礼拝堂において「今、見つめるべきもの―被災地石巻から」と題して講演した内容をまとめたものである。